

9/12
7/14日

戦災孤児の歌 「反戦」込めて

無職

(和歌山県 66)

今年の終戦の日、テレビで見た写真が忘れられない。京都駅をめぐらしている戦災孤児とされる少年の姿だ。その姿に孫たちの元気な笑顔や教職時代に触れ合った子どもたちが重なった。子どもに戦争で親を失うというひどい体験をさせてはならない、絶対に繰り返さないぞと決意した出来事を思い出した。

1969年1月19日の「声」

欄に、京都の養護施設で育った戦災孤児の女性が29歳で息を引き取り、無縁墓地に埋葬されたという投稿が載った。投稿者は女性が育った施設職員の方。この投書をもとに詩人の野田寿子さんが作詞、福岡教育大の森脇憲三先生が作曲し、「墓碑のないうち」という交声曲ができた。私は当時福岡教育大生。森脇先生から指導を受け、野田さんから曲の背景を聞き、60人近くの仲間と共に反戦の気持ちを込めて、同年12月、大学の混声合唱団定期演奏会で歌った。

憲法9条を持ち、この70年、戦争で血を流さなかった日本はすばらしい。戦争は必ず弱い者が犠牲になる。子どもを大切にしない国は滅びる。9条をないがしろにし、「戦争のできる国」になる危険がある安全保障関連法案に、反対の声を輪を広げよう。子どもは国の宝。私たちの未来、希望だから。